

よくある 異種婚姻譚

八百年を独りで生きた竜が選んだのは、
誰にも望まれなかった庶子の娘だった。



その日、メイリ・フォン・ヘルデンプルクは自分の死を覚悟した。

もっとも覚悟といっても彼女自身が想像していたそれとは随分と趣が異なっていた。彼女が想像していた死とはすなわち、例えば流行病だとか怪我だとか、そういう常識的な死であるからだ。

目の前にいるのは頭から尾の先まで軽く城館の大広間を埋め尽くすような巨軀を持つ、鱗の一枚一枚が凍てついた湖面のように蒼く煌めく竜。

彼女の常識の中に竜によって食い殺されるという死の形は存在しなかった。

竜が存在すること自体は知っていた。ヘルデンプルク公爵家の書庫に収められた古い地誌には北方の霊峰ヴァイスツアーンに棲むとされる竜族の記述がある。だが書物の中の竜はあくまで羊皮紙の上に描かれた挿絵でしかなかった。現実の竜はインクと空想では到底追いつかない圧倒的な質量で彼女の前に横たわっている。

その竜はメイリを見つめていた。

琥珀色の瞳だった。冬の低い陽が氷の結晶を透過するときのような冷たくも温かい光を湛えた瞳が、まっすぐにメイリを捉えている。獣が獲物を見定めるような凜猛さはない。かといって動物が同族を認識するときの無関心さでもない。それはもっと切実でもっと痛切な、おおよそ竜という存在には似つかわしくない眼差しだった。



春の終わりの事だった。

野草の標本を採りに出たのが今朝の話である。メイリの数少ない趣味のひとつが植物の押し花であり、とりわけ高地に咲く小さな花々を好んで集めていた。たったひとりで。供の者をつけるほどの身分でもなく、つけてほしいと頼むほどの厚かましさも持ち合わせていなかったから。

メイリは公爵家の庶子である。

父であるヴォルフガング・フォン・ヘルデンプルク公爵と、契約結婚で結ばれた女のあいだに生まれた娘。母はメイリを産んだのち、産後の肥立ちが悪く世を去った。メイリという名は母がつけたもので古い言葉で「木漏れ日」を意味する。木々の葉の隙間からこぼれ落ちる、あ

の淡い光のことだ。

名前の由来を知ったとき、メイリは不思議に思った。木漏れ日とはつまり光そのものではない。大きく輝く太陽でもなければ、闇を切り裂く稲妻でもなく、ただ何かの隙間から漏れ出た、かすかな明るさに過ぎない。母がその名に何を込めたのかは永遠にわからない。なにしろメイリが母と過ごした時間はこの世に生を受けてからわずか三日だけだったのだから。

公爵家での暮らしが不幸だったかと問われれば、メイリは答えに窮しただろう。衣食住に不足はなかった。教育も受けさせてもらえた。読み書き、算術、歴史、地理、礼法。庶子とはいえ公爵家の名を冠する以上、最低限の教養は備えさせるというのが父の方針だった。

ただ、そこに温もりはなかった。

父は月に一度、メイリの教育の進捗を確認するために書斎に呼びつけた。メイリが暗唱課題を間違えなく諳んじれば頷き、間違えれば短く指摘する。それだけだった。褒めることも叱ることもない。まるで帳簿の数字を確認するような、事務的で淡白な時間だった。

正妻であるアンネリーゼ公爵夫人もメイリに対して冷淡だったわけではない。ただ関心がなかった。アンネリーゼにはふたりの嫡子がおり、その養育に忙しく、庶子の娘に注ぐ視線の余

裕がなかっただけの話である。

冷遇ではない。無関心だった。

そしてメイリはその無関心の中で育つうちにひとつの欠落を抱えるようになった。

愛というものがわからない。

書物の中にはたくさんのお愛が書かれている。吟遊詩人が高らかに歌い上げる騎士と姫の恋物語。母が我が子のために命を賭す英雄譚。離れ離れになった恋人たちが数十年の歳月を経て再会する壮大な叙事詩。どれも美しく、どれも心を打つ。けれどメイリにとってそれらはあの植物図鑑に載っている見たことのない異国の花と同じだった。知識としては知っている。しかし手で触れたことがない。香りを嗅いだこともない。だからそれが本当はどういうものなのか、実感としてはわからない。

わからないまま十七年を生きてきた。

そして今、そのメイリの目の前に一頭の竜がいる。



竜が口を開いた。

正確には鋭い牙が居並ぶ巨大な顎がゆっくりと動き、そこから信じがたいことに人の言葉が紡ぎ出された。低く、深く、冬の夜に凍った湖の底から響いてくるような声だった。

「恐れるな」

無理な相談だった。メイリの膝は既に笑っていたし、手にしていた押し花用の挟み板はとうの昔に地面に落ちている。両手は握りしめた裳裾をつかんだまま離れず、心臓は肋骨の内側で暴れ狂っていた。

「我はジギスムンド。霊峰ヴァイスツアーンに棲まう蒼氷の竜。おまえを探していた」

探していた、という言葉の意味がメイリの頭にはすぐには入ってこなかった。竜が人を探す。何のために。食べるため。いや、それならばこんな悠長に話しかけてはこないだろう。だが他に理由が思いつかない。

「おまえの名を知りたい」

「……メイリ」

答えてしまったのは恐怖のあまり逆に思考が麻痺していたからだ。名前を訊かれたら答える。それは幼い頃から叩き込まれた礼法のひとつであり、目の前の存在が何であれ、身体に染み付いた作法が勝手に口を動かしてしまった。

「メイリ」

竜が彼女の名を復唱した瞬間、奇妙なことが起きた。蒼い鱗の表面を薄い燐光が走ったのだ。それは心臓のある辺りから始まって、波紋のように全身へと広がり、やがて竜の巨体全体がほのかな光に包まれた。

「やはり、そうか」

ジギスムンドの声が震えた。巨大な竜の声帯が震える振動は大気そのものを揺らし、メイリの足元の草が波打った。

「おまえが我の番だ」

その瞬間、世界が裏返った。

メイリの視界が白く弾け、足元の草も丘の斜面も蒼い竜の巨体も一切が消え去り、代わりに

押し寄せてきたのは自分のものではない記憶の奔流だった。

砂漠があった。

灼けた大地の上を歩く長い黒髪の女がいる。その女の傍らに、痩せた砂色の犬が一頭。干上がった泉を探して何日も歩き続けている。女が倒れたとき犬は女の顔を舐め、水の匂いがする方角へ女を導いた。泉を見つけた女は膝について犬の首を抱き、犬は女の頬を舐めた。二つの命はその泉のほとりで寄り添い合い、女が老いて息を引き取るまで片時も離れなかった。

場面が変わった。

雪原があった。白い毛皮の狼と銀青色の鱗を持つ老いた蛇が、洞穴の中で身を寄せ合っている。狼の体温が蛇の冷えた鱗を温め、蛇は狼の首に幾重にも巻きついて風から守った。猟師の矢が狼の脇腹を貫いたとき、蛇は猟師に噛みつき毒を注いだ。狼は傷のまま蛇を背に乗せて走り、二匹は遠い森の奥で死んだ。同じ時刻に。

場面がまた変わった。

港町の夕暮れ。荷を運ぶ少年と、船大工の娘。少年は片足が悪く、娘は生まれつき声が出ない。少年は娘のために手話を覚え、娘は少年のために杖を彫った。白髪になるまで添い遂げ、

同じ年の同じ月に二人は穏やかに目を閉じた。

戦場。

甲冑の騎士が泥の中で膝をついている。その背を庇うように立つのは小柄な従者の少女。敵兵の槍が少女の胸を貫き、騎士が絶叫した。騎士は少女を抱いて戦場を走り、野宮地の天幕で少女は騎士の腕の中で息を引き取った。騎士はその後の戦に自ら突入し、二度と帰らなかった。

花畑。

嵐の海。

地下水脈の暗闇。

炎に包まれた城壁の上。

場面が矢継ぎ早に切り替わる。獣と人。人と人。獣と獣。虫と鳥。あるいは名前すらない何かと何か。姿が違い、生きた時代が違い、言葉が違っても、そこにはいつも二つの魂があった。片方がもう片方を見つけ出し、引き寄せられ、寄り添い、あるときは最期まで添い遂げ、あるときは引き裂かれ、そしてまた次の生で巡り合う。

ある生ではジグスムンドにあたる魂のほうがメイリを見つけ出した。番を探し当てる感覚が鋭い生だった。ある生ではメイリにあたる魂のほうの世界の果てまで歩いて相手を探し出した。

どちらが見つけるかはその時の生による。敏感なこともあれば鈍感なこともある。それでも必ず巡り合った。一度の例外もなく。

悲恋もあった。出会った瞬間に片方が死んだ生も、触れ合うことさえ許されなかった生もある。それでも魂は覚えていた。次の生で、また出会うために。

幻視がメイリの意識に灼きつくように流れ込み、そして唐突に途切れた。

同じ瞬間、ジギスムンドもまた見ていた。

竜の琥珀色の瞳が大きく見開かれ、全身の鱗が激しく明滅している。ジギスムンドの視界にもまた押し寄せていたのだ。砂漠の犬と女。雪原の狼と蛇。港町の少年と娘。戦場の騎士と従者。何千何万という生の記憶が竜の巨大な意識を貫き、八百年を生きた竜の知性をもってしてなお処理しきれない奔流となって流れ込んでいた。

そのすべての生の中に、いつもこの魂がいた。姿形は変わっても、匂いが、温度が、魂の手触りが同じだった。だからこそ番だとわかった。探し出すことができた。今回の生ではジギスムンドのほうが敏感だった。ヴァイスツアーンの山頂から遙か遠くのこの丘にいるメイリの魂の気配を嗅ぎ取り、八百年の孤独を終わらせるために飛んできたのだ。

「……見えたか」

ジギスムンドの声が震えていた。

「見え……ました」

メイリの声も震えていた。膝からすべての力が抜けて草の上に座り込んでいる。あの砂漠の女の孤独を覚えている。あの港町の娘の温もりを覚えている。あの戦場の従者の痛みを覚えている。すべて自分のものではない記憶なのに、なぜか涙が止まらなかった。

「これが番だ。我らの魂は幾千の生を経て互いを求め続けてきた。今生もまた、巡り合った」
番。つがい。

その言葉をメイリは知っていた。書庫の奥にあった古い竜族研究の文献に記述がある。竜族は生涯にただ一度、魂の片割れとも呼ぶべき存在に巡り合うことがある。それは種を超えることもあり、竜と人のあいだで番が成立した記録も数百年に一度の頻度で残されている。

だが今のメイリにとって、それはもう書物の中の知識ではなかった。自分の身体を貫いた幻視の記憶が、番というものの意味を理屈ではなく魂で理解させていた。

番とは竜にとつての運命そのものだった。竜の寿命は千年を優に超える。その長大な生の中でたった一度だけ訪れる、魂の共鳴。番を見出した竜はその存在のために生き、その存在のため

めに戦い、その存在を失えば、やがて自らも朽ちる。竜にとって番とは呼吸をするのと同じくらい自明で心臓が鳴るのと同じくらい不可避な、生の根幹に関わる結びつきだった。

ただし幻視を見たからといって、すべてを受け入れられるわけではなかった。

幾千の生の記憶が魂を貫いたのだ。頭が追いつかない。心臓がまだ暴れている。膝は草の上に座り込んだまま立てなくて、涙は流れているのに理由がわからない。番だということは理解した。理解してしまった。だがこの巨大な蒼い竜と自分がこれからどうなるのか、十七年間をほとんどひとりで生きてきた少女にはまだ何も見えなかった。

「……待ってください」

メイリは震える声で言った。竜を見上げる。琥珀色の瞳がまっすぐにこちらを見つめている。あの幻視の中で幾千回も見つめ合った瞳だ。知っている。知っているのに、まだ怖い。怖いというのとは少し違う。自分の中に押し寄せた何かがあまりにも大きすぎて、処理しきれないのだ。

「父に……相談させてください。わたしだけでは、何も決められません」

ジギスムンドは長い沈黙の後、静かに頷いた。

「待とう。我は八百年を待った。もう少しだけ待つことはできる」

メイリは膝に力を入れて立ち上がった。足が震えている。丘を下りながら何度も振り返った。蒼い竜は丘の上で微動だにせず、琥珀色の瞳でメイリの背を見送っていた。



ヴォルフガング・フォン・ヘルデンブルク公爵は午後の執務をちょうど終えたところだった。年の頃は五十を少し過ぎたあたり。鉄のように白みがかった灰色の髪を後ろへ撫でつけ、驚のような鋭い目をした長身の男だった。表情の変化に乏しく、領地の者たちからは畏れられていたがその実、ヘルデンブルク公爵領の安寧は彼の卓越した行政手腕によって保たれていた。

書斎の扉が控えめに叩かれたのはちょうど夕刻の鐘が鳴る少し前のことだった。

「お父様」

メイリがこの呼び方で彼を呼ぶのは珍しい。普段は「公爵閣下」か、よくて「父上」だ。それが「お父様」になっている時点で何か尋常ではないことが起きたのだとヴォルフガングは即座に理解した。

もつとも理解はしたが表情は変わらなかった。手にしていた羽ペンを静かにインク壺の脇に置き、扉口に立つ庶子の娘を見やる。泣いた跡のある顔。草の汚れがついた裳裾。だが息は乱れていない。走ってきたわけではなく、足元の覚束ないまま歩いて帰ってきたのだろう。

「話がある顔だな。座れ」

「竜が、いました。丘に」

「竜」

「わたしの番だと。それから……幻を見ました。たくさん生の記憶が流れ込んで……砂漠の女と犬、雪原の狼と蛇、港町の少年と娘……全部、わたしたちだったんです」

ヴォルフガングの右眉が微かに持ち上がった。この男にしては最大級の驚きの表現だった。

「詳しく話せ。順を追え」

メイリが椅子に腰を下ろし、途切れ途切れに事の次第を語り終えるまでに四半刻ほどを要した。その間、ヴォルフガングは一言も口を挟まず、ただ鋭い視線で娘の顔を見据えていた。

語り終えたメイリの頬には涙の跡があった。混乱と動揺で泣いたのだろう。ヴォルフガング

はそれを見ても特段の感慨を示さず、ただ静かに問うた。

「その竜は今どこにいる」

「丘に。待っていてくれると言いました」

「名を名乗ったのだな。ジギスムンドと」

「はい」

「蒼氷の竜か。文献にある」

ヴォルフガングは立ち上がり、書棚の奥から一冊の革装丁の書物を引き出した。古い竜族の系譜が記された稀覯本だった。頁を繰る指の動きに迷いが無い。この男は公爵家の書庫に収められた全ての書物の配置と内容を正確に把握していた。

（体験版はここまで）